学校教育目標　「笑顔と拍手につつまれて　夢に挑戦　根岸の子」

ねぎし

横浜市立根岸小学校
学　校　だ　よ　り
１１月号　家庭数
令和４年１１月３０日
ホームページ

失敗を成功に変えていくために必要なこと

児童支援専任　小川　義雅

「ウルトラマンのカラータイマーのように、相手の気持ちが目に見えたらいいのに…」これは５年生の秋、担任の先生に叱られ、自分の無責任な行動を悔いて泣きながら家に帰ったときに思った私の心の中の声です。仲のよかった友だちの家庭環境について失言してしまった私に、多様な家庭があることや、その状況については気を配るべきこと、何より自分の発した言葉には責任が生じるということを恩師である鈴木先生が教えてくれました。５年生の頃に友だちを傷つけてしまった私ですが、現在、根岸小学校の児童支援専任をしています。役割は、名前の通り、根岸小の子どもたちが安心して安全に生活することができるように、「支援」をしています。

「失敗は成功のもと」と言いますが、子どもたちは、未熟で成長途中なので失敗をします。そもそも、子どもたちの日常は、失敗だらけです。転ぶこともあれば、手に持っているコップを落とすこともあります。この二つの例で言えば、転んだり、落としたりした“行為”から予測される“結果”は、１年生に質問しても答えてくれます。当然、「膝を擦り剝いて怪我をする」や、「コップが割れてしまう」といったものです。なぜ結果が見通せるかというと、幼児期に家庭で大切に育てられながらも、その失敗を“経験”してきたからです。幼児期の「基本的な生活習慣の形成」の成果だと言えます。そして、子どもたちは失敗をしたときに「しっかり手をつくといいよ」「落とすと割れてしまうことがあるから両手で持とうね」というように、次の失敗を招かない方法や失敗をしたときの正しい対処法等をお家の方から伝えられ、一人でできるように「支援」されてきたのではないでしょうか。

小学校でも同じです。小集団、学級や学年といった小さな社会の中に関係性が広がる中で、社会性が発達していきます。仲のよい友達やグループができ、その集団の中で失敗をすることも、ごくごく自然なことです。小学校段階の学童期は、生活を通して「他者への思いやり」や、「自他の尊重・他者の視点に対する理解」といった“相手”を学んでいきます。相手のことが、まだわからない部分があるために関わり方で失敗します。最も身近な友達を傷つけてしまうのです。相手の気持ちは目に見えず、特にSNSやメール等では、相手の表情だけでなく声質、抑揚等もわかりません。そのような状況で身体や言葉、スマホ等の遣い方・扱い方を間違えることで傷つけたり、傷つけられたりしてしまいます。それでよいということではありませんが、私は、せっかく失敗したのなら必ず成長につなげてあげたいと常に思っています。その失敗を、相手を知る力に変えたり、相手との心の距離を推し測る力をつけたりできる成長の糧にしてほしいです。むしろ相手・友だちがいなければ経験することのなかった「成長の好機」と捉え、どうすれば同じことに陥りにくいか、起きた時にどう行動するとよいかを子どもたちと一緒に考えています。

このような「失敗」こそ、子どもたちがやがて大人になった時、「転ぶときは、手をつく」、「コップは両手で慎重に」のように、「相手との関わり方は、このようにした方がよい」「SNSは、こういう点に気を付けよう!!」という長い人生の「成功」に結び付けてほしいです。子どもたちの失敗を、成長するための見えない「教材」に捉え直す手助けを学校では行っています。これからも、失敗を乗り越えようとする子どもたちを励まし、苦い経験の中であっても、学ぶべきものを一緒に探したり、それを価値づけたりする「支援」を、家庭、地域、学校で一緒に考えていきたいと思っています。